

9 外来指導におけるHbA1cの理解度と1年後の血糖コントロールについて

内山恵美子・岡村 幸代(高木内科)
岡田真津美・高木 正人(クリニック)

患者指導に関わってみると、知識の不足または誤った知識を持っている人が少なくない事がわかった。HbA1cについて調査・指導したところ半数近くの人が全く理解してなかった。1年後再調査・再指導の結果、理解した人の数は増加したがHbA1cの値は悪化していた。全く理解できていなかったが1年後理解できるようになった25名に重点をおいて、この原因と指導効果を検討した。個別にHbA1cについての調査・指導を行い、ポスターにて視覚で訴え、可能な限り糖尿病手帳に自己記入させ注目するようにした。結果、血糖コントロールの改善したのは、年齢が若く約40~60歳で推定罹病期間が約1~2年で食事療法のみの人であった。年齢が約60歳を超え推定罹病期間が約6年以上で特に経口血糖降下剤療法の人は、血糖コントロールは改善しないことが分かった。今後、合併症・指示カロリー・理想体重についての指導効果の検討と、さらに改善意欲が湧く指導法の検討が必要と思われた。

10 糖尿病教育入院の検査項目についてパンフレット作成から実施に至るまでの一考察

一患者にとって理解しやすい検査説明とは何かを考える一

下間玲美奈・沢田サチコ(木戸病院)
坂井 静子・舟越 羊子(看護部)
下斗米孝之・津田 晶子
濱 齊 (同 内科)

【目的】(1)糖尿病教育入院参加者に検査説明用紙を配布し、検査の概要の治療の動機づけをする。(2)検査説明用紙を使用することにより、看護婦間の統一した指導をはかる。

【対象・方法】糖尿病教育入院参加者30名(20~70代)を対象に、看護研究メンバー3名が検査を実地体験後、検査説明用紙を作成し教育入院参加者に配布しアンケート調査を実施する。

【結果】(1)対象者の80%以上から効果ありと

の回答が得られ、検査に対する関心も高く自己管理への動機づけになった。(2)内容がわかりやすくスムーズに業務に取り入れられた。(3)一定した内容での指導の必要性を再認識することができた。

【結論】(1)効果的な教育を実践するためには、医療スタッフと患者が共通した内容でかかわる事が重要である。(2)内容についてわかりやすく伝え、理解を得ることが重要である。(3)今後他部門へも情報提供しながら連携を密に図ることが大切である。(4)検査説明用紙をマニュアル化することにより、一定の内容で継続した指導が実践され有効である。

11 ノボペン300の指導のまとめ

平田 憲雄(下越病院 薬剤課)

【はじめに】昨年5月~薬局で再指導をおこない若干の知見をえました。

【対象】ノボペン300を使用している外来患者47名。男性19名、女性28名。

【結果】ほとんどの患者さんは、注入単位を間違わずに注射ができていましたが自分の使っているペンフィルの名前や何単位入っているか知らない方は多く、またペンを振ること、空うちをすることなど注射の準備操作や正しい注入がきちんとできている方は半数以下でした。

また今年行った再々指導では再指導により理解が進んでいました。

【考察】ノボペン300のマスターのためには繰り返し指導をすすめていく必要があります。

12 インスリン治療における夜間の低血糖について

田村 紀子・百都 健(新潟市民病院 第二内科)
田中 直史

【目的】午前3時血糖(以下3BS)<FBSの頻度、3BSが低血糖域にある頻度、3BS<FBS群の臨床的背景をみること。

【対象】外来通院中のインスリン治療患者で夕前か眠前に混合型か中間型を用いている120人。

3BS \geq FBSをH群(62人)3BS<FBSをL群(58人)とした。

【方法】 眠前, 午前3時, 翌朝食前の自己血糖測定を2から3回施行。無自覚低血糖はアンケート調査し, 背景因子はカルテ調査した。

【結果】 3時血糖がFBSより低くなる頻度は48.3%だった。両群ではFBS, 眠前血糖に差があった。L群では眠前中間型注射が多い傾向にあった。3BSが低血糖域の7人中4人に無自覚低血糖の可能性があった。

【結語】 夕前混合型あるいは眠前の中間型注射の単位を決める場合, FBSだけでなく3時血糖も参考にすべきである。3時血糖が低血糖域の場合, 無自覚低血糖に注意する必要がある。

13 インスリン導入ガイドラインの作成とその有用性

百都 健・田村 紀子 (新潟市民病院)
田中 直史 (第二内科)

【目的】 インスリン (I) 治療導入時のインスリン必要量決定に関する明確なガイドライン (G) はない。Gを作成し, その効果を検討した。

【対象と方法】 1995年にGを作成。作成前の90年, 93年, 作成後の96年, 99年に血糖コントロールを目的に入院し, I治療を導入した患者を対象とし, 各年度間の臨床背景 (年齢, 罹病期間, BMI, 入院時HbA1c, 合併症, 入院時治療法等), 在院日数, 入院医療費, 退院後3カ月 (M), 6M, 12MのHbA1cを比較することでGの有用性を検討した。

【結果】 各年度入院患者群の臨床背景には差はなかった。在院日数は90年群39.1日, 93年群34.2日に比べ, 96年群17.7日, 99年群14.1日と明らかに短縮した。入院医療費は約60万円から約40万円へ減少した。HbA1cは90年入院群3M7.1%, 12M7.8%, 93年群3M7.8%, 12M8.3%と漸増する傾向に比し96年群3M6.9%, 12M6.9%, 99年群3M7.9%, 12M7.3%と不変または低下する傾向が見られた。

【考察と結論】 Gは有用である。

II. 特別講演

「楽しくてためになる糖尿病患者教育の実践
—患者のやる気を引き出すノウハウ—

神戸大学医学部衛生学講座

坂根直樹

第31回新潟糖尿病談話会

日時 平成14年4月20日(土)
午後1時30分より

場所 三条・燕地域リサーチコア7F
(県央地場産センター別館)

I. 一般演題

1 超速効型インスリン治療への転換：第1報 「当院におけるペン型インスリン治療の現状と問題点」

青木 祥子・下園 光枝
片桐 歩・小林 則子
長部千絵子・林 泰弘 (長岡中央総合病院)
渡辺 七朗 (薬剤部)
八幡 和明 (同 内科)

先日発売された超速効型インスリンは, 食直前注射が可能な製剤でありこの特徴に注目し, 超速効型インスリンへの転換にむけて当院でペン型インスリン注射をしている患者さんの実態を調査し問題点を検討した。

【方法】 アンケートを実施し, 回答方法は自己記入方式で無記名。

回答患者さんの背景はカルテ調査した。

【結語】 アンケート結果より62.1%の患者さんが現在のインスリン療法に満足していることから切り換え対象を明確にすることが重要と思われる。32%の患者さんが「食直前」注射を希望と, 選